東京学芸大学紀要　総合教育科学系Ⅱ　66: 397－402，2015.

健常幼児のひらがな獲得に関する研究

―― 獲得の現況と不安定さに着目して ――

歌代　萌子*・橋本　創一**・林　安紀子**

教育実践研究支援センター

（2014年9月30日受理）

1．問題と目的

本や新聞，テレビ，手紙，メール等，文字は情報伝達やコミュニケーションの手段として私たちの生活の中に溢れている。子どもにとってもそれは同様で，子どもは就学前のかなり早くから多様な遊びや活動を通じて文字の世界に慣れ親しんでおり，読み書きを習得し始めるのは3歳から4歳にかけてであると言われている（小森ら，2003；高橋，2006）[4)7)]。国立国語研究所（1972）[3)]の調査では，就学前の5歳クラス児でひらがなを1文字も読めない子どもは1.1%に過ぎず，60%以上の子どもが60文字以上のひらがなを読むことができると報告されている。これと同様の方法で行われた島村ら（1994）[5)]の調査では，60文字以上のひらがなを読める子どもは，5歳クラス児で80%以上に達しており，ほとんどの子どもが就学前からひらがなを読み始めていることがわかる。これら2つの調査の変化を踏まえると，現代ではさらに多くの子どもが就学前からひらがなを読むことができると推測されるが，現代の幼児がどれほど，そしてどのように，ひらがなを獲得しているのかはあいまいな部分が多い。一方で，知的・発達障害児（LD児も含む）のひらがな獲得は，突出して獲得が早い子どもやなかなか獲得がすすまない子ども，ディスレクシアのようにつまずきを示す子どもなど，獲得状況が多様化している（例えば，日高ら，2007；小枝，2009；吉岡ら，1993）[1)2)6)]。健常児であっても，小学校で読み書き指導を受ける前の幼児では，獲得状況は子どもによって様々であり，獲得過程においては，つまずきや不安定さがみられることが予想される。健常児の場合，これらのつまずきや不安定さを早期に乗り越え，ひらがな獲得がすすんでいくと思われるが，知的・発達障害児では，つまずきや不安定さが長期にわたって続く場合もあり，安定した獲得に向けては支援が必要であると言える。そこで，就学前の健常幼児の多様化しているひらがな獲得の現況を明らかにすることで，知的・発達障害児のひらがな獲得を支援する手がかりを得ることができるのではないかと考えた。本研究は，健常幼児を対象とし，ひらがなの獲得状況とつまずき・不安定さを明らかにすることを目的とした。

2．方法

2．1　対象

健常幼児61名（CA4歳児：20名，CA5歳児：20名，CA6歳児21名）とその保護者

2．2　手続き

対象児にひらがな課題を実施し，保護者に子どものひらがな獲得に関するアンケートの記入を依頼した。

2．3　実施課題

2．3．1　ひらがな課題

各課題は個別に実施された。

[1] ひらがな音読課題：ひらがなカードを見て，音読する課題。[1]-①対象児の名前の音読，[1]-②ひらがな1文字ずつの音読，[1]-③ひらがな単語を音読し，書かれた単語を示す絵を選択する課題（図1）で

＊　東京学芸大学大学院教育学研究科
＊＊　東京学芸大学（184-8501　小金井市貫井北町4-1-1）

あった。[1]-③の刺激は，ひらがな清音のみで構成された単語３語，濁音・半濁音を含む単語２語，拗長音を含む単語，促音を含む単語がそれぞれ１語ずつであった。[1]-②は，[1]-③の単語を構成する文字と対象児のなまえを構成する文字を刺激として用いた。

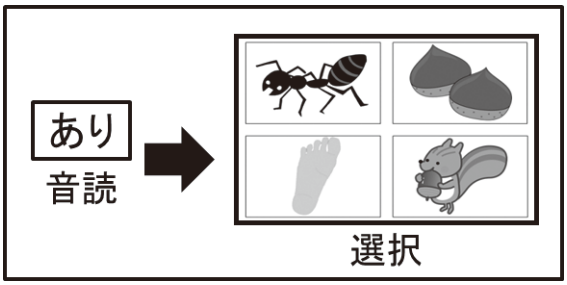

図１　単語音読課題

[2] ひらがな選択課題：音声または絵カードで示されたひらがなを選択する課題。[2]-①８文字のひらがなが並んだ中から実験者が音声提示した１文字を選択する課題，[2]-②絵カードを提示し，その絵の名前が正しく書かれた文字列を選択する課題（図２）であった。[2]-②の刺激は，[1]-③と同様の構成で異なる単語を用い，[2]-①は，[2]-②の単語を構成する文字を用いた。

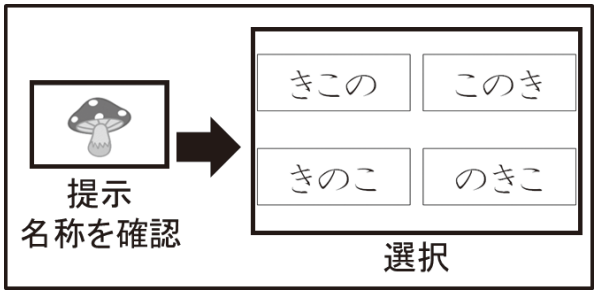

図２　単語選択課題

２．３．２　ひらがな獲得の経緯・道具に関するアンケート

対象児のひらがな獲得について，保護者に選択式で回答を求めた。質問項目は，①どのようにしてひらがなを覚えたか（経緯）②何でひらがなを覚えたか（道具）である。

３．結果と考察

３．１　ひらがな獲得状況

国立国語研究所（1972）[3] を参考に，ひらがな音読課題の結果から，ひらがな獲得水準をつくると，表１のように分類することができた。各水準の分布は図３の通りである。

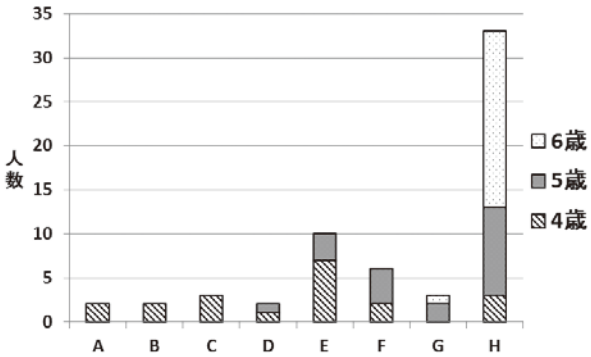

図３　各水準の分布

１文字も読めないA水準は４歳児２名（3.3%）のみであった。年齢が上がるとともに，高い水準が増えていき，６歳児ではほとんどの対象児がH水準である。このことから，多くの子どもが４歳時点でひらがなを読み始めており，６歳児では，１文字ずつであれば，特殊音節も含めてほとんどのひらがなを音読可能となっていることが考えられる。全体をみると，H水準が最も多く，次いでE水準が多くなっている。半数以

表１　ひらがな獲得水準

水準	人数	清＋濁・半濁音読字数（26文字）	拗・促（各1語ずつ）	内容
A	2名	0	×	１つも読めない
B	2名	１～５	×	名前は読めない　姓名構成文字など数文字を読める
C	3名	６～15	×	名前を読める　姓名構成文字と清音数文字を読める
D	2名	16～20（６割以上）	×	清音はほぼ読め，濁・半濁音は半分ほど読める
E	10名	21～26（８割以上）	×	清音と濁・半濁音はほぼ読めるが，特殊音節は読めない
F	6名	21～26（８割以上）	どちらか	清音と濁・半濁音はほぼ読め，特殊音節のどちらかが読める
G	3名	21～25（８割以上）	両方	特殊音節含めてほぼ読めるが，やや不安定さがある
H	33名	26	両方	１文字音読と特殊音節の音読はすべて可能

上の対象児が１文字音読や特殊音節文字の音読を安定して行えると言えるが，E水準の多さからは，清音や濁・半濁音に比べて，特殊音節の獲得の難しさがわかる。また，４歳児は，A水準からH水準まで幅広く分布されており，個人差が大きい。これには，子どもの興味関心や，親の教育関心，幼稚園・保育所，生活環境等，様々な要因が関連していることが推測される。

３．２　ひらがな獲得の経緯・道具（保護者アンケート）

対象児がどのようにひらがなを獲得したかという問い（獲得経緯）の回答結果は図４の通りである。

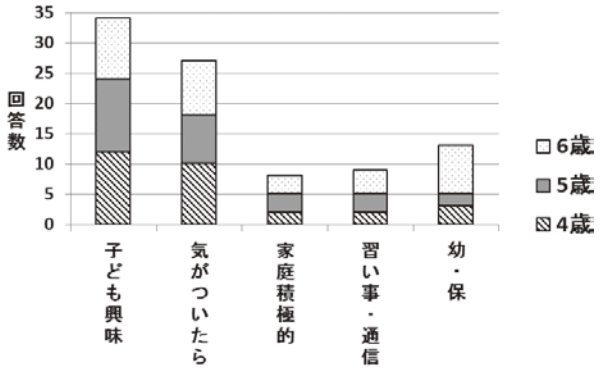

図４　ひらがな獲得経緯

回答内容は，「子どもが興味を持って聞いてきたので教えた」「気がついたら覚えていた」「家庭で積極的に教えた」「習い事や通信教育で習った」「幼稚園・保育所で習った」であった。「子どもが興味を持って聞いてきたので教えた」「気がついたら覚えていた」という回答は，どちらも子どもの興味によって文字を獲得し始めたものであり，「家庭で積極的に教えた」「習い事や通信教材で習った」というのは家庭での積極的な教育ということができる。全体をみると，「子どもが興味を持って聞いてきたので教えた」「気がついたら覚えていた」の回答が多く，子ども自身がひらがなに興味をもち，獲得し始めることが多いことが明らかになった。子どもがひらがなに興味を抱き，読もうとしたり，大人に聞くところからひらがな獲得が始まるため，その時期は子どもによって異なり，３．１の結果にみられた４歳児の獲得水準のばらつきの大きさに関係しているのではないかと考えられる。また，数として多いわけではないが，全ての年齢で家庭や幼稚園・保育所で教えたという回答がみられ，就学前から子どもにひらがなを教え，獲得させようという大人の意識があることも明らかになった。

対象児が何でひらがなを獲得したか，という問い（獲得道具）の回答結果は図５の通りである。

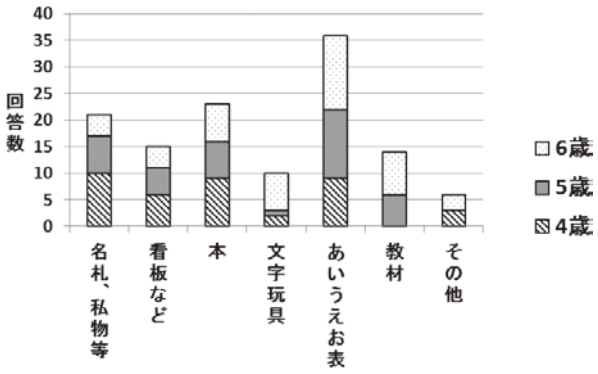

図５　ひらがな獲得道具

「その他」の内容は，「テレビのテロップ」「ゲーム」「車両ナンバー」等であった。年齢ごとでそれほど大きな違いはないが，5, 6歳児にのみ「教材」という回答がみられる。４歳児では，あいうえお表は用いられるものの，名札や私物，本，看板等の身近な物や玩具からの獲得が主であり，年齢が上がると，あいうえお表や教材等，ひらがなを獲得するための道具の割合が増えてくることがわかる。年齢が上がるにつれ，遊びや生活の中で自然に獲得というより，子どもの興味に応じつつも，学習という要素が強まり，ひらがな獲得がすすんでいくことが示唆された。

３．３　ひらがな獲得過程における不安定さ

各課題の正答率の分布は図６～９の通りである。

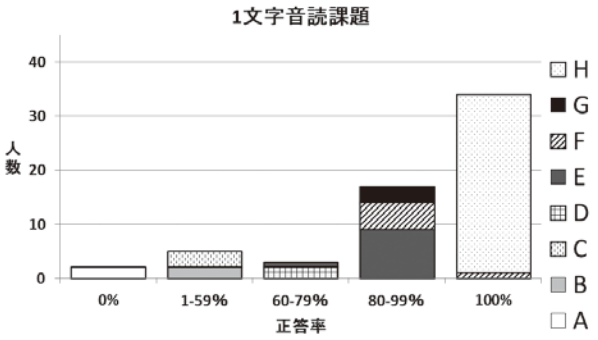

図６　１文字音読課題正答率の分布

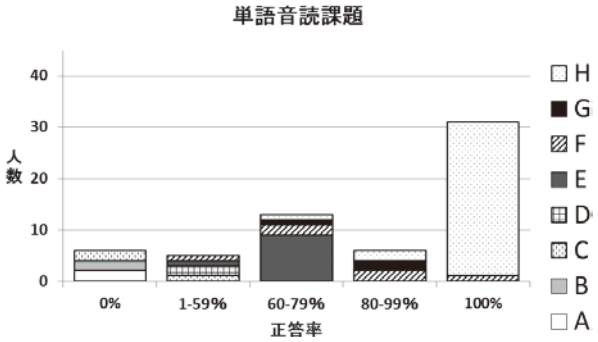

図７　単語音読課題正答率の分布

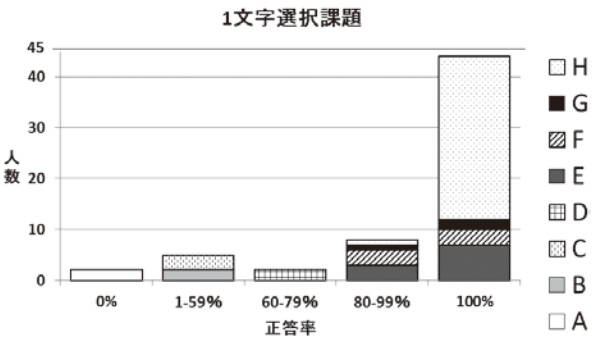

図８　１文字選択課題正答率の分布

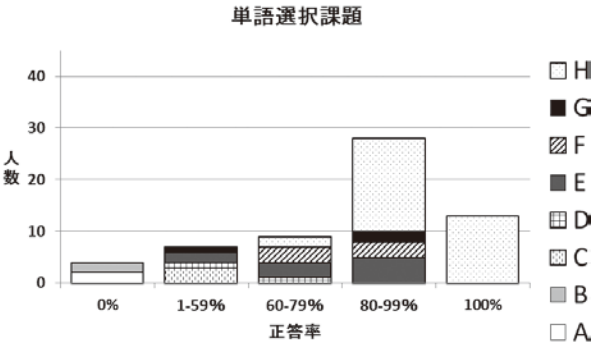

図９　単語選択課題正答率の分布

音読課題（図６，７）をみると，１文字音読課題に比べ，単語音読課題の正答率が低くなっていることがわかる。未獲得の文字があるために，単語を正しく音読できないという誤答はもちろんあるが，１文字ずつは読めるにも関わらず，単語課題は誤答という不安定さを示す対象児もみられた。内容としては，１文字ずつは読めるのに，単語では読み誤り（例：“き”は正しく読めるが，“うきわ”は「うさわ」と読む）や，別単語として読む（例：“あ”“り”は読めるが，“あり”を「あめ」と読む），横書きの単語を右から読む（例：“でんわ”を「わんで」と読む）などの反応である。また，少数ではあるが，単語は読めるが１文字ずつでは読み誤る（例：“にんぎょう”は読めるが，“ぎょ”単独では「ぎよ」と読む）という不安定さを示す対象児もみられた。ひらがな獲得過程においては，１文字読みと単語のかたまり読みが混在していたり，読みのルール理解が不十分である等，様々な形で不安定さがみられることが明らかになった。

また，単語選択課題（図９）では，他３課題に比べ，正答率100％の対象児が少なくなっており，H水準児でも誤答が多くみられる。正答率が80～99％であった対象児の多くが，特殊音節単語の課題で誤答となっており，特殊音節の音読が可能であっても誤答となる対象児が多くみられた。特殊音節の単語選択課題は，救急車の絵を見て，【“きゅうきゅうしゃ”“きゅきゅしゃ”“きゃうきゃうしゃ”“きうきうし”】の選択肢の中から正しい単語を選択する課題と，ろけっとの絵を見て，【“ろけっと”“ろけと”“ろっけと”“とっけろ”】の中から正しい単語を選択する課題であった。これらの課題の正答率の低さから，音声や頭の中で唱えた単語から，長音や促音を認識し，文字に変換することや，文字で並んだ単語の細かい表記の違いに気づき，正しく読み比べることは，ひらがな獲得過程の子どもにとっては難しいことであり，ただ特殊音節文字を音読することと同時に獲得されるわけではないことが示唆された。音声で提示された単語から，長音や促音を認識することには，音韻意識が関連しているのではないかと思われ，特殊音節の表記に関しては，読みだけでなく，書字の経験を積むことで獲得が安定していくのではないかと考える。これらについては，さらに検討が必要である。

すべての課題において100％の正答率であった対象児は13名（21％）のみであり，１文字課題や音読課題では安定した獲得だと思われたH水準児の中にも，単語選択課題では誤答があり，不安定さを示す対象児がみられた。また，本研究では全課題正答であった13名であっても，他の課題を行えば，不安定さが示される可能性もないとは言えず，ひらがな獲得過程においては，１文字読みや音読のみといった単一的な側面で子どもの獲得状況を判断するのではなく，複数の側面からみていくことが必要であると考えられる。そうすることで，子どもの獲得状況やつまずき，不安定さをより詳細に把握することができ，安定した獲得に向けた支援へとつなげていくことができると思われる。今後は，知的・発達障害児のひらがな獲得について調査し，健常幼児の獲得状況やつまずき・不安定さとの比較から，ひらがな獲得に向けた支援について検討していくことが求められる。

文献

１）日高希美・橋本創一・大伴潔：健常幼児と発達障害児の音韻意識の発達過程と文字獲得との関連性について，東京学芸大学紀要　総合教育科学系，58，405-413，2007.

２）小枝達也：第46回大会公開・教育講演報告　教育講演３発達性読み書き障害のすべて，特殊教育学研究，46(5)，319-321，2009.

３）国立国語研究所：国立国語研究所報告45　幼児の読み書き能力，東京書籍株式会社，1972.

４）小森伸子・高橋登：文字知識の発達―文字配置ルール利

用の違いからの検討―，読書科学，47(1)，12-22，2003.
5）島村直己・三神廣子：幼児のひらがなの習得―国立国語研究所の1967年の調査との比較を通して―，教育心理学研究，42(1)，70-76，1994.
6）吉岡伸・松野明子：精神遅滞児におけるひらがな文字の読みとその他の能力に関する追跡的研究，特殊教育学研究，31(3)，45-51，1993.
7）高橋登：読み書き能力の文化的発達の理論に向けて，心理学評論，49(1)，197-210，2006.

健常幼児のひらがな獲得に関する研究

―― 獲得の現況と不安定さに着目して ――

Research on Acquisition of Hiragana in Normally Developing Children:

Focused on Current Acquisition State and Instability

歌代　萌子*・橋本　創一**・林　安紀子**

Moeko UTASHIRO, Soichi HASHIMOTO and Akiko HAYASHI

教育実践研究支援センター

Abstract

In this study, we examined current acquisition state and instability of hiragana in normally developing children. The result revealed that most children began to read hiragana at 4 years old, and can read most hiragana letters including a special syllables at 6 years old. On the other hand, when we examined acquisition state from some sides, it became clear that the acquisition in the acquisition process still had instability. The results suggested that it was necessary to understand the acquisition state more exactly by understanding the current state of the hiragana acquisition of the child from the plural aspects to examine support for the stable hiragana acquisition.

Keywords: normally developing children, hiragana, acquisition, instability

Center for the Research and Support of Educational Practice, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan

要旨:　本研究は，健常幼児を対象として，ひらがな獲得の現況と不安定さについて調査をした。その結果，多くの子どもが４歳時点でひ らがなを読み始めており，６歳時には，１文字ずつであれば，特殊音節も含めてほとんどのひらがなを音読できることが明らかになった。一方で，獲得過程においては様々な形で不安定さがみられることも明らかになり，安定したひらがな獲得に向けた支援を検討するためには，子どものひらがな獲得の現況を複数の側面から捉え，獲得状況をより正確に把握する必要があることが示唆された。

キーワード: 健常幼児，ひらがな，獲得，不安定さ

*　Graduate School of Education,Tokyo Gakugei University
**　Tokyo Gakugei University（4−1−1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo, 184−8501, Japan）